

フォルクスハウスをめぐって

秋山東一 | LANDship 主宰

聞き手

権藤智之 | 東京大学 准教授

フォルクスハウスのはじまり

——フォルクスハウス(1994年)は、木造軸組に集成材・金物工法を用いて木質パネルをはめ込む住宅です。構法やプランにルールがある規格的な住宅でありながら、内外観にも工夫を凝らした先駆的な取り組みが見られます。

秋山 開発の経緯の前に、開発する組織、その成り立ちをご説明します。

1987年、藝大建築科名誉教授の奥村昭雄が考案したパッシブソーラーシステムの普及啓発のための組織、OMソーラー協会が浜松で立ち上がりました。住宅の設計施工を本業とする地域工務店をフランチャイズという形で組織化することが、当時としては新機軸でした。同時に、奥村昭雄門下というか、関係のあった建築家が集められ、オーエム研究所なる組織がつけられました。メンバーは奥村事務所のスタッフだった丸谷博夫、奥村と一緒にソーラー研^{註1}で研究活動をしていた野沢正光と石田信夫、そして永田昌民と秋山東一の5人でした。奥村昭雄からは、「君たちは難しいことはやらなくていいから、とにかく、OMソーラーが付いたカッコいい家をつくれ」と言われました。

地域の気候風土をわかっている地域工務店にこそパッシブソーラーシステムの普及を担って欲しいというのが奥村昭雄、OMソーラー協会の願いであり意図でした。OMソーラーに加盟している工務店は全国にあり、その地域ごとの特性を活かしてOMソーラー住宅の技術と施工地域の独占を保障されるという仕掛けです。そこで初めて設計プロパーの私たちは、地域で住宅を設計施工する世界があることを知ったわけです。

オーエム研究所に属しているわれわれ設計者はそのサポート、設計指導等を担うのが仕事でした。たくさんのOMソーラー住宅の基本計画をしたり、彼らの拠点

たるモデルハウスを設計することになりました。

当時を振り返ると、それまで自分の設計事務所のやってきた住宅をOMソーラーというパッシブソーラーの住宅というものに進化させることができる好機と考え、今までのコンセプチュアルな世界から、きちんとした機能や仕掛けがある住宅がつかれると思いました^{図1}。

OMソーラーからフォルクスハウスへいく流れですが、加盟工務店であり、基本計画等を手伝っていた甲府の小澤文明氏(小澤建築工房)から相談を受けたのがきっかけです。その時に説明を受けた工法が、断熱気密製品を扱っている商社、宇部貿易の「ザ 在来」という新規の工法で、集成材の柱・梁と金物で構成される骨組みにパネルをはめ込んで断熱気密を確保するものでした。まだ未完成の工法で、宇部貿易の下、北海道札幌に「住宅気候研究所」をつくり、室蘭工業大学の鎌田紀彦教授の指導のもとに菅波貞夫、村田直子によって開発されていたのです。

菅波貞夫にいろいろ聞くなかで、未完成の「ザ 在来」にはまだまだ余地があり、OMソーラー住宅のシステムをつくる可能性を感じました。ですから、高気密高断熱の木造在来工法の躯体とOMソーラーを組み合わせたら最高の住宅になるのではないかと、OMソーラー協会に提案したのです。パネルはクレテック金物を

註1 奥村昭雄を中心とした私的な勉強会で、1981年に始まる

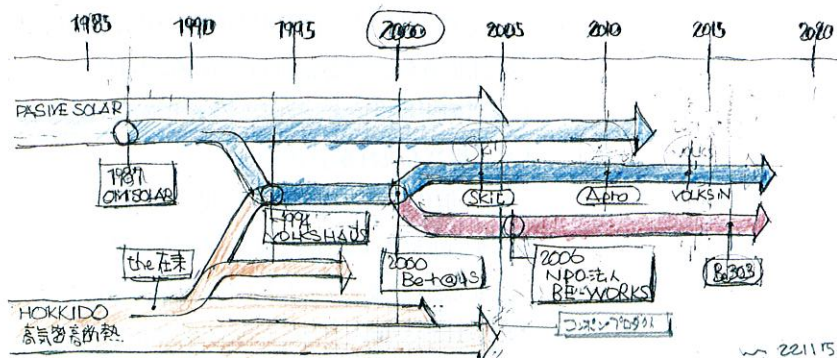


図1 活動の流れ(秋山東一作成)